残らなかった美女と野獣

hk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残らなかった美女と野獣

【コード】

N5139W

【作者名】

hk

【あらすじ】

王子の姿が野獣から美青年に戻った途端、愛が冷めた美女のおはなし。

昔々あるところに、美女と野獣がいました。

彼らよりも後にか先にはわかりませんが、同じような美女と野獣が他にもいて、そちらの方の二人は後の世で美しい愛の物語としてとても有名になりました。

さて、有名にならなかった方の美女と野獣も、有名になった方とよく似た物語を持っていました。

王子は魔女の呪いを受けて野獣になってしまいましたし、美女はそんな王子とあるきっかけで一緒に暮らすようになりました。魔女に呪われてしまうような王子は怒りっぽくて、偉そうで、人の話を聞きませんでした。美女と暮らすうちに心を入れ替え、美女もそんな王子に心を許していきました。野獣の噂は近隣の村々に染みこみ、恐れられていたので、二人は試練に見舞われましたが、中略。

王子の呪いは解けたのです。

鋭い爪と牙を持ち、黒々とした毛に覆われていた大型の獣が、なんとということでしょう。金髪碧眼のスマートな美男子に。

奇跡を目の当たりにした村人たちは野獣を退治しに来たことなどすっかり忘れて引き上げていきました。

それは有名な物語ととてもよく似ていて、本当は格好が付かなかったあれやこれやを省略しなかったとしても、村で一番若い少女の半分くらいは涙を浮かべて聞いてくれそうなお話でした。

しかしそんな少女たちも、物語が終わった後の美女と野獣 美女と王子を見れば、なんと言ったかわかりません。

それというのも、美女の愛情は王子が野獣から戻った瞬間、さっぱりと冷めてしまっていたのでした。

「……誰？」

「おまえ、もうこの姿に戻って一ヶ月もたつのだぞ。いいかげん慣

れてくれてもいいではないか」

「うん、で、誰？」

王子はにこにここと笑っていますが、美女の眼差しは氷よりも冷ややかでした。

美女は野獣が実は王子であったことなど承知です。野獣であったときから本当は人間であることなど割と早い段階でわかっていたのです。

ただ美女は野獣が人間に戻るときが来るだなんて、考えてもみなかったのです。

「もふもふの毛を返さない！　ぴこぴこの耳を返さない！　ぱたぱたの尻尾を返さない！　寄るなすべすべ！　面白くもないわっ！」

城の使用人たちは身をすくめました。

王子は野獣になつてから長い年月を人間に恐れられて過ごしたので、美女の言い様はあんまりと言えばあんまりでしたが、王子は気にした様子がありません。

美女はふつふつと腹が立ってきて、久しぶりにムチをふるってやりました。

美女の名誉のために言っておきますと、野獣は最初、とても怒りん坊で人の話を聞かなかったのです。そして大層な天の邪鬼でもあったので、すぐに牙をガチリガチリと鳴らしたり、伸び放題の爪で脅したりしたのでした。

それでも野獣が哀れに見えれば、美女は二度とムチで打つたりなどしなかったでしょう。

「あんっ！」

王子はいい声で鳴きました。

美女はしばらくムチを使わなかった理由を思い出して、用意していた二撃目をひっこめました。

「生やしてちょうだい」

美女が催促しているのは、もちろん耳や尻尾やもふもふです。

「無理な相談だ」

王子は偉そうに笑いましたが、その目は美女の手にあるムチをうずうずと見ていました。野獣の姿だったなら、尻尾が元氣よく揺れていたでしょう。

美女は怒ることに疲れてしまいました。

そして、我慢することにも疲れていました。

この一ヶ月、美女はずっと怒りながら我慢していたのです。

自分のための我慢だったのか、野獣のための我慢だったのか、王子のための我慢だったのかはわかりません。

それはたった一つの言葉でした。

「私、もうあなたを愛してないわ」

近頃の美女の態度がそういうプレイではないととつくに気づいていた使用人たちは、柱の影でこう言いました。

「悲しいけれど、責めちゃあダメだよ。今まで丸かった鍋が突然四角くなって、丸いフタが合いますかね」

彼らは王子が突然野獣に 自分たちの姿も城の家具に変えられて周りの人々が離れてしまったときも、ただ悲しげにそれを見送ったのでした。

ところで王子の反応はというと、屁のカツパでした。

もちろん美女の気持ちが消えてしまったのは悲しいことです。しかし王子は自分の愛する人を見失ったわけではありません。美女の気持ちを今の自分に向けるべく、よりいっそうの愛情を美女に注ぐことにしたのでした。

何せ今の王子は芸術家がやれ肖像画を描かせてくれ彫像を作らせてくれと列をなしそうなほどの美男子です。魔女のお灸と美女のムチが効いたおかげで、性格も性癖を除いてはなかなかの好青年です。去っていく人々の背中を見送り、城中の鏡を打ち壊すしかなかったあの頃とは違うのですから。

しかしそんなことは美女には理解できないことでした。

やっこのことで孤独から逃れた彼に、ひとでなしな拒絶を叩きつけたことは、裏切り者と罵られてしかるべきだと思っただけです。

美女は王子に気持ちよく嫌われて、大手を振って城を出て行くつもりだったので。

けれど、美女が我慢をやめた日からずっと、美女の部屋の前には一輪の薔薇が置いてあります。

つぼみよりも鮮やかな、数日後には大いに花弁を誇る姿が目に見えるような薔薇でした。

実は、最初の日には置かれた薔薇はすでに咲き誇った見事な威容の花だったので、美女が無造作に開いた扉がちょうど花を置こうとしていた王子の額にぶつかって、その瞬間一枚の花弁が落ちてしまったので、次の日からはまだ数日若い薔薇に変わったのでした。

美女は扉をそつと開いて素早く左右を見回すと、ねずみよりも機敏に薔薇を拾って扉を閉めます。そしてカーテンの裏に隠した花瓶にこっそりと生けておくのでした。

美女は王子が自分を嫌いにならなかった理由を考えました。

考えても考えてもきれいに収まる答は出なかったので、王子は呪われたのだらうと思いました。

今度の呪いは魔法ではありません。

彼が獣になる呪いを受けてから十年もたつて、その孤独を癒したのがよりによって自分であった、という呪いです。

彼は元々人の話を聞かないたちでしたから、思いこみも激しいに違いありません。

美女はそう思いました。

であるからには、王子に懇々と説いてあげなければなりません。

王子が美女を嫌いになつてからでないと、美女は落ち着いて城を出ることができないのです。

「私はちゃんと、おまえのことを愛しているよ」

王子はくすぐったそうに微笑みました。

美女は何度も「それは違う」と言いましたが、聞き入れる様子はありません。

それどころか美女をなだめるように抱きすくめて、何度もキスを重ねました。

野獣であった頃に比べると半分も細くなった腕なのに、美女が叩いても、突っ張っても、王子はびくともしませんでした。

美女はイライラとして、「じゃあどこが好きなのよ！」と叫びました。

「ごくり。」

恐々としていた使用人たちも思わず耳を澄ませましたが、彼らはそれを後悔することになりました。

「おまえのムチよりキレイのいいムチはそうはあるまい」

王子は実に堂々と、100点満点の回答でも述べるように答えただけです。

残念な元野獣に、美女は完全に冷めてしまいました。

「……ならもうムチは使わないわ」

「ならばヒールで」

「私のヒールはもう床しか踏まないわ」

美女はげんなりしています。

「だいたい、あなたは人間じゃないの。いつまでムチに打たれて
いるつもり？ それで喜ぶなんて、恥ずかしいとは思わないのかし
ら」

「おまえは初めて私をムチ打ったときもそういう目をしていたな…

…」

王子はうつとりしています。

「ああもつつ、美形が悶えるのってなよっとしてて気持ち悪いのよ
！」

と、直後に美女は後悔しましたが、言葉のムチはすでに王子を喜

ばせていました。いえ、悦ばせていました。

そうした反応も、獣ならばギャップが可愛く見えて、呆れつつも受け入れて、叩いたところを撫でてから「ごめんね」とキスをしたりしたものでした。けれど、まっとうな美青年がくねくねしてもかんに障るだけです。

王子に嫌われる方法はわかりました。何があっても蜂蜜のように優しく、とろとろに甘やかして、いらぬ刺激を与えなければいいのです。

しかし美女もまた、昔の野獣ほどではないにしても怒りん坊で咄嗟に手が出てしまうタイプでしたから、それはとても難しいことだと思いました。

それに、美女は一度我慢をやめたのだから、これからまた我慢をしてもいたずらに事態を長引かせるだけだとわかっていました。

ああ、その体に耳が、尻尾が、たっぶりの毛が生えていたら、私は四六時中抱きしめられて、唇が腫れ上がるくらいキスをされたってかまわないのに。尻尾がぱたぱたと喜ぶのなら何回だってムチ打ってあげるのに。

そこで、美女は一つ思いつきました。

思いつきを実行する前に、王子の了承を得なければなりません。

「ねえ、私を愛しているなら、何をされても文句はないのよね？」

王子はとてもしいい返事をしました。

翌日、朝早くに、美女は一軒の小さな家を訪ねました。

その家は城からも村からも遠すぎず近すぎないところに建っていて、辺りには人の気配というものがありませんでした。森の中に埋もれるようなたたずまいで、右を見ても左を見ても切り株の一つもなく、扉の前も草が伸び放題です。

美女の父親が野獣の城から解放された帰途に見つけたものなのですが、彼は君子危うきに近寄らずという格言を嫌というほど学んだばかりでしたので、娘に「きつとわけのわからないものが住んでい

るから、絶対に近寄らないように」と教えたのでした。

さてそのわけのわからないものの正体に、美女はあまり根拠のない自信を持っていました。

用心深いそれに逃げられないように、とびきり澄ました声で言いました。

「もしも魔女さん、あなたの王子が可愛かったら、私の話を聞くことね」

しばらくして、扉の向こうからしわがれた声がしました。

「どなたさまだえ？　ここは身寄りのないばあのお小屋だよ」

声は震えていて、今にも消えてしまいそうです。

美女の自信は揺るぎませんでした。

「無駄なことはやめてちょうだい。執念深い魔女がめでたしめでたしで終わる物語を許すかしら？　呪いが解けたらそうとわかるようにするものよ。また呪わなければならぬもの」

「なんの話だえ？　わけのわからないことを言わないでくれよう」「ええ、良心的な魔女ならば、違う意味で呪った相手をそのままにしておかないわ。あなたには責任がある。王子を憎んだにしろ、咎めたにしろ、あなたは見守る理由があるわ」

「おまえさんの言っていることは、ちつともわけがわからない」

「ねえ、お願いよ。あの人をもう一度野獣にしてちょうだい」

辺りが静かになりました。

森の隙間から霧が漏れだしてきて、にわかに肌寒さを感じます。

「なぜだい」

豪風のような声が足下から吹き上げました。

「中身は何も変わらないのだよ」

「ええ、変わらない。でも、変わってしまった」

美女は扉に手を突いてうつむきました。

「私が映る瞳の大きさも、私に触れる手のひらの分厚さも、私の肌をくすぐる固めの獣毛も」

私の言葉を聞き逃すまいとしきりに角度を変える耳の動き。

キスをするときには牙が当たらないようにそつと触れる繊細さ。抱き寄せるときに爪をひっかけまいと腕でとらえるぎこちなさも。

まだうち解けていない頃、揺れる尻尾を捕まえようと追いかけて叱られた思い出。耳を触らせてほしいと懇願し続けてようやく許してもらえた喜び。

今も鮮明に残っているのに、あの人の姿はまるでなかったことのように。

風が吹きます。

「おまえは醜い姿の私を追い払ったときの王子と同じ事を言っている」

美女はその話を王子から聞いていました。城に一晩泊めてくれと頼んだ老女の願いを突っぱねたのだと。もう一度頼まれても聞かなかったのだと。

そして醜い老女は美しい魔女へと姿を変えて、王子はおぞましい獣になりはたたということでした。

「そうかしら？ 私は違うと思うけれど」

美女は首を傾げましたが、そのときにはもう遅かったのです。

木々が斜めに。小屋も斜めに。ぐらぐら、ぐるり。

突然世界が大きく揺れて、美女は思わず目を閉じました。

しばらくして目を開くと、周囲は一面霧に覆われていました。

目の前にはやけに背の高い、美女の五倍ほどの高さの緑色があって、魔女の小屋はどこにもありませんでした。

さて目の前の緑はなんなのでしょう。美女の目には草のように見えるのですが、そんなにも背の高い草はおそらく草とは呼びません。魔女に魔法をかけられたことは間違いありませんでした。

何度見ても巨大な草しかなかったので、美女は小屋の扉に触れていたはずの手をじいっと見つめました。

吸盤があります。

そつと足を見つめます。

水かきがあります。

美女は驚いて、それから三時間もの時間をかけてようやく知った
事実、自分はカエルに変えられてしまった、ということでした。

たった三時間でしたが、人間の世界とカエルの世界は随分違うと
いうことがもうわかっていました。

一歩一歩が短くてろくに進めないし、見るものすべてが大きく見
えます。

美女はまず呪いを解くことを考えましたが、何せ呪いを解くのに
十年もかかった例を見たばかりです。しかも今回は真実の愛を見つ
けよ、との指示も何ありませんでした。そうそう乗り気にはなれ
ません。

美女は半ばあきらめて、逆にこれはチャンスではないか？ とい
う気になってきました。

何せ、カエルです。水たまりに映った姿はきれいな真緑でしたが、
カエルの持つ美しさを一体誰がたたえてくれるでしょう。目はぎよ
ろぎよろとして得体が知れないし、舌は馴染んだムチのように伸び
縮みして便利でしたが、キスをするには向きません。

心変わりをしたカエル一匹、城から去ったところで、惜しまれた
りはしないでしよう。

八工を獲って暮らす勇氣はまだありませんでしたが、なんの、自
分には元人間の知恵があるのだ、カエルの寿命くらいは生き抜いて
やろう、と、美女は逆方向に前向きでした。

魔女を相手に道理に適わぬ願いを訴えたのだから、このくらいの
ことは甘んじてしかるべきだろうとも思うのでした。

さて、本格的なカエル生を歩み出す前に、家族と、それからやつ
ぱり王子には挨拶をしていかなばなりません。

幸い美女は野獣になっていたときの王子と同じように、人の言葉を
しゃべることができました。

大切な人たちに理由もわからないまま何年も帰らぬ者を心配させ

なくてすみませす。

しゃべるカエルなんてものは見つかつてはならない生き物なので、長居することはできませんが、どうしても立ち寄りなければなりませんでした。

美女は早速城に向かいました。ぺちぺちと歩いてはなかなか進まないの、ぴょんぴょんと跳ねていきます。霧が出ているうちに急がないと、体が乾いてしまいそうです。

まだ勝手がわからないので、跳ねると同時につい舌を伸ばしてしまうのが気になりますが、今はそれどころではありません。

カエルの視界で人間の目で見えていた道を認識するのは大変なことです。

城までいったい何時間かかるのか美女にはまったく見当がつきませんでした。

森はどんどん黒ずんでいきます。

次第に晴れてきた霧のせいではありません。夜が近づいているのです。

美女はぴょんぴょん跳びはねました。間違えて垂直に飛んでしまったり、木にぶつかって痛がったりしました。

苦勞の甲斐あって、日が沈みきらないうちに城の姿が見えてきました。

美女はいつそう高く跳びはねました。

そのときです。

低木の影から突然黒いかたまりが飛び出しました。

「ひっ」

思わずもらしてしまった人間の声をぐっと押しこめると、美女は急いでかたまりを確かめました。

それは一匹の黒い野犬でした。

ぐるぐる、と喉を鳴らしているのは目の前からしか聞こえてきません。群れではないようでした。村人が捕まえていたのが逃げたのでしょうか。

狼でもない。群れてもいない。

美女は自分を奮い立たせました。

犬は牙の横からよだれをしたたらせて、前足に力をこめました。その足の爪がたわむれに引っかかっただけで、カエルは死んでしまつてしよう。よく見ると、犬は愉快そうに笑っているのです。

美女は高く跳び上がりました。

それまで美女がいた土に、犬の爪がくいこみました。

成功ですが、失敗です。

美女はもう一度、地面を強く蹴りました。

ぎゃうんっ！

獣の弱点が鼻面であることは、一ヶ月ちょっと前にムチが当たってしまったことがあるので知っています。

美女は犬の鼻に力いっぱい体当たりして、そのまま背中を蹴って木の根の奥に隠れました。犬が鼻を突つこんできても大丈夫なくらい、奥へ奥へ。

城に帰り着いたのは、月が炭のような夜をぽっかりとくりぬいてからでした。

城の中では人々が慌ただしく動いていました。

美女は行き先を告げないままいなくなつたので、全員であちこちを探し回っているのです。

美女がなんて声をかけようかと悩んでいると、王子が血相を変えて飛びこんできました。

「帰って来たか？ 村にもいない！ どこへ行ったんだ！」

使用人たちは首を振るばかりです。

「もしや、何か事件でも」

「そろそろ見つけないと狼が」

「ああ、心配だよ！ 心配だよ！」

この城で暮らしていて美女の心変わりを知らない者はいないので、誰も美女が王子を切り捨てて去つたとは思わなかったので。

美女は精いつぱい叫びました。

「私はここにいるわ！」

使用人たちは右や左を見回しました。

「ここよ！」

王子はゆっくりと下を向きました。

そこには一匹のアマガエルがいました。

朽ち葉色の真ん中に一滴の墨を落としたまん丸な目。真一文字に裂けた口。つやつやとした背中。先端に球を埋め込んだか細い指。

どう見ても美女の面影はありません。しかし王子には自分自身の不思議な経験があつたので、まさか、と思いました。

美女はたたみかけるように自分に起きた出来事を話しました。

「そんな……」

一転して静まり返った城の中で、王子の嘆息が響きます。

片手に美女を乗せ、そのひんやりとした手足の細さを見つめながら、

「これではムチを持つことも、ヒールを履くこともかなうまい」

とてもがっかりした様子でうなだれました。

美女はこの期に及んでそれなのかと、非常に腹が立ったので、思いつきりジャンプしてやりました。

びたんっ！

王子の鼻先を全力で殴打して戻ってきました。

鼻息荒く、心底見下した目で見てやりました。

王子は星を詰めこんだような目でカエルに迫りました。

「できるじゃあないか！」

その興奮ぶりと言ったら！

周囲からファンファーレが聞こえてきそうです。

美女の眼差しは止めどなく冷ややかさを増していきます。

王子はますます感じ入り、カエルの口にキスをしようとして長い舌で打たれました。

王子が言ったことは言うまでもありません。

まったく。

せつかくカエルになったたというのに、これではなり損というものです。

美女は気が収まらなくて、何度もびつたんびつたん王子の鼻を低くしてやりました。

王子は嬉しそうにしていますが、さんざん堪能したあとで、「わかってている、おまえはもう私を愛していないのだったな」と言いました。

「……カエルになるほどとは思わなかったが」

王子は寂しそうでした。

美女は二回ほど舌を短めに伸び縮みさせ、ごくんとのみこんで、王子の手から飛び降りようとしました。

小さなカエルが乗る手のひらを、王子のもう一方の手が上からそうつとフタをしました。

「だが、やはり私はおまえを愛している」

次の日、王子はカエルを連れて、魔女の家があったという場所に行きました。

使用人たちはみんな一生懸命お祈りして帰りを待っていました。

相手は王子を十年の長きにわたって苦しめた魔女なのです。あの十年があつたからこそ今のだとかわかつてはいましたが、それはそれ、というものです。

彼らは何度も「お供します」と迫りましたが、王子は断固として連れて行ってはくれませんでした。

「奥様の呪いがとけますように！」

皿を洗いながら、壺を磨きながら、上の空で仕事をしながら、彼らは繰り返しつぶやきました。

そうして夕方戻ってきたのは、一匹のカエルと、一匹の野獣だっ

たのです。

本当はお昼頃には帰ってこれただけだけど、美女が大変腹を立てていたので、何度もびったんびったんして、うっとりして、帰りが遅くなったということでした。

一ヶ月前にはいつも二人で紅茶を飲んでいた時間、魔女の家を出て、城までの道を野獣に運ばれている途中、カエルはその頬に全力で体当たりを喰らわせました。

「どうしてよ！」

野獣は口に伸びた牙を剥き出しにします。初めて見る人はたいていわかつてくれませんが、野獣は笑っているのです。

「おまえはこの姿の私が好きなのだろう」

美女の声は甲高く跳ねました。

「だからって！」

「それより、おまえは良かったのか」

野獣はカエルを目の前に掲げて、大きな顔でのぞきこみました。

魔女は「もう一度野獣にしてくれ」という王子の願いを耳にして、なんだかひどく呆れてしまったようでした。そうして、こんなことは今回限りだとしつこく念を押してから、美女も元の姿に戻してやるのか？ と言ったのです。

美女にとっては柵からぼた餅、降ってわいた幸運でした。

いくらカエル生を前向きにとらえてみても、人間に戻るものなら戻りたかったに決まっています。あっさり野獣に姿を変えた王子の方が本当はおかしいのです。

ありつたけの罵声を浴びせて、それでも野獣に変わってしまった王子をさらに「正気じゃないわ！」と罵って、

しかし美女は魔女の厚意を断りました。

ただ、断る前に、一つだけ横の野獣を見上げて聞きました。

「あなたは私がカエルでもかまわない？」

野獣は耳をぴこんと傾けて、

「かまうように見えたのか？」

と言いました。

「……なら、これでいいわ」

そう答えた美女でしたが、後から思い返してみても、野獣の行動はおかしいのです。野獣も今再び「良かったのか」と聞いてくる辺り、美女の選択も常人から見て到底まともといえる行いではないのでしょうか。

そう思うととても腹が立って、ふて寝をしようとうずくまった野獣の手があんまりふかふかして気持ちがいいものだから、美女は必要以上にびつたんびつたんして「馬鹿！」と言っしかなかった。野獣は喜んでくねくねとするばかり。

城に着いた二人を迎え入れた使用人たちは、もちろん色々と思うところはあったものの、「ああ、これで収まった」とうなずきました。

こうして呪いが解けたはずの王子は再び野獣の姿へと変わってしまいました。

けれど、周辺の村人たちがかつてのように野獣を恐れることはありませんでした。

一度王子に戻ったところを見ていたからでしょうか？ ええ、それもあるでしょう。

しかしもつとも大きな理由ははっきりとしています。

鋭い牙を剥き出しにして微笑み、見つめる、その恐ろしげな爪の生えた両手の上には、いつでも一匹のカエルがちょこんと乗っていたからでした。

あの有名な美女と野獣と違って、カエルと野獣の物語が有名になることはありませんでしたが、二人はいつまでも幸せに暮らしました。

めでたし、めでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5139w/>

残らなかった美女と野獣

2011年9月8日03時21分発行